

音楽情報

ピリスが再び舞台上に

2018年に引退を発表したマリア・ジョアン・ピリスに、パーヴォ・ヤルヴィとチューリヒ・トーンハレ管弦楽団は、再び舞台上に立つモティヴェイションを与えたようだ。10月18日にはベートーヴェン「ピアノソナタ第17番《テンペスト》」、「同第31番」、「同第32番」のリサイタル、そして10月21日からはトーンハレ管との共演でシヨパン「ピアノ協奏曲第2番」を、チューリヒで3晩連続弾いたあと、ルガーノへもツアーに出かけた。10月22日に所見したそのオーケストラ・プログラムはアルヴォ・ペルトの《聖三・祝文》で始まった。ペルトらしい哀愁に満ちた音楽が、宗教を超えた人間という存在の哀しさ、DNAのレヴェルか

ら流れ続ける哀惜のように、体の芯までしみわたる。85年生きてきたエストニア人の、優しさあふれる悟りのような音楽は、世代を問わず、時代を超えて全世界で共感を得られるであろう。

そして現れたピリスは、鋭さに欠けるが優しいオーケストラの導入部に続いて、自然にシヨパンの世界を描き始めた。彼女の、秋の陽光を思わせる温かい音と美しいフレーズに酔わされた。第2楽章ではさらに歌心を発揮し、彼女自身の輝かしいキャリアを追憶しながら、集大成を聴かせてくれているようだ。ドラマティックな部分ではオーケストラとの掛け合いが対話のようで、ヤルヴィとの意気投合ぶりがうかがわれる。アタッカで始まった第3楽章では女性らしい優しさも聴かせ、フレーズごとに最高の「歌いかた」をするピリスのピアノ



再び舞台上に帰ってきたピリス。筆者撮影

と、それに敏感に応えるヤルヴィの棒さばきは興奮をもたらす。ピリスが弾くすべてのフレーズに身を委ね、能動的に堪能した濃厚な20分だった。

最後はモーツァルト「交響曲第39番」で、粘っこいほどレガートを重視した上品な演奏だったが、頭のなかはピリスの歌うピアノに占領されていた。ヤルヴィの指揮はリズム的アクセントではなく、曲想としてのアクセントを駆使して彫りの深い演奏を聴かせ、終演後は会場が一体となって熱い拍手を贈っていた。

チューリヒ歌劇場のリサイタル

10月のチューリヒ歌劇場では、二人の注目ソプラノが立て続けにリサイタルを開く予定であった。そのうち、5日はマリナ・レベカがイタリアとロシアをテーマにプログラムを組んだ。前半はヴェル



チューリヒ歌劇場の「リサイタル」に出演したレベカ。筆者撮影

デイとトステイ、レスピーギで、イタリア語が不明瞭になるほど、暗い響きでオペラティックに歌いきったが、1000人強しか収容できない当劇場では、彼女のフォルテの高音は耳障りだった。しかし音楽的にはイタリアン・カラーを十分理解しており、最後の《霧》など完璧に表現したので、ヴェルデイのスピントな役やカタラーニ《ワリー》が聴いてみたいと思った。

休憩を挟んでロシア語になると、その鋭利な高音が中和される。セザール・キユイ、チャイコフスキー、ラフマニノフの歌曲でどんだんスケールが大きくなり、最大限に達してプログラムを終えたあとが真骨頂。アンコール曲目のブツチーニ《蝶々夫人》から《ある暗れた日》には大人すぎる歌い回しと、低音がキツそうだったが、次のヴェルデイ《シチリア島の夕べの祈り》のアリアでは、ヴェルデイが望んだだろう歌い回しを聴かせ、最後は《ワリー》のアリアで燃えつき、観客を総立ちにさせた。マリア・カラスを彷彿させる響きが随所で聴かれ、これからはますます楽しみになった。

10月24日に予定されていたアニヤ・ハルテロスは政府間の移動制限を受けて、来年4月に延期となった。

オペラ公演は、シーズン・オープンニングから、社会的距離を確保のためにオーケストラと合唱が練習場で演奏し、グラスファイバーで歌劇場に届ける方法が取られているが、ドニゼッティ《マリア・ストウアルダ》の再演直前に、電気回線

スイス NOW

新型コロナウイルス
関連情報

スイス全土がホット・スポットに

とうとうスイス全土がホット・スポットとなり、いままでフランスやオーストリアからの入国時に自己隔離を義務づけていたスイスは、ドイツに入る際には自己隔離を強いられる立場になってしまった。スイス連邦政府は「もっとあとに到達することを想定していた感染者数を、10月初旬に早々と超えてしまった」、「このままいくと2週間で集中治療室のベッドの空きがなくなる」と、新規感染者数増加の速度に危機感を隠せないが、ロックダウンは避ける方針で、感染防止対策強化は各州に任せていた。いちばん厳しい規制を敷いたのはベルン州で、「ナイトクラブ等に加え、美術館・博物館、図書館等の閲覧エリア、ゲームやスポーツセンター、映画館、コンサート会場や劇場も閉鎖」、他国からコンサート・ツアーでスイスに入り、突然演奏会がキャンセルされてしまったケースもある。ティチーノ州では「外出中すべての行程でマスク着用義務」を決定した。その他の州も、「介護施設や病院等への面会訪問禁止」(ルツェルン州)、「球技や格闘技等の禁止」(ジュラ州、ヌーシャテル州)、「公共空間で5人以上の集まりを禁止」(ソロトゥルン州)など、独自の規制強化を始めたが、感染者の増加速度は収まらず、10月28日、連邦政府が全国統一の規制を発表した。そのなかで音楽関係者にとっていちばん大打撃なのが、「50人を超えるすべてのイベントの禁止」である。自動的に歌劇場やオーケストラ、コンサートホールなどが即刻休止状態に入った。

チューリヒ歌劇場ではすでに、バレエ公演『眠れる森の美女』(チャイコフスキー)のダンサーが新型コロナに罹患したため、出演者は自己隔離、公演は休演処置を取っていた。その後、歌劇場関係者の感染は総裁をふくむ10人に広がっているといわれている。チューリヒ州独自の対策としては、公共交通機関内だけでなく、駅構内や屋外にある停留所でもマスク着用、また、中学生以上の生徒は校内でのマスク着用を義務づけている。



チューリヒ歌劇場の『眠れる森の美女』から
©Gregory Batardon

ウェンディ・ウォーターマン

リーズ国際ピアノコンクール創設者で音楽教育家としても名高いファニー・ウォーターマンの姪、ウェンディ・ウォーターマンは10歳でロンドンのロイ

の不具合で音が送れないことが発覚。急きよ合唱団のみ劇場に召集され、オーケストラの部分で練習ピアノリストが弾き、とりあえず開演した。その間に問題が解決したため、合唱団は休憩中に練習場へ戻り、後半は通常の遠隔共演の形に戻る事ができたという。

苦労続きの歌劇場だが、当バレエ団が、有名なダンス専門誌「DANCE」で今年の最優秀バレエ・カンパニーに選ばれ、当バレエ団のディレクターであるクリスティアン・シュブツクが演出したラッヘンマン作曲の歌付きバレエ『マツチ売りの少女』は、最優秀プロジェクトに選ばれた。

ヤル・フェスティヴァル・ホールにデビューして注目されたが、スイス人と結婚し家庭を優先させた人生を選んだ。子育て後にはアーウィン・ゲージに師事し、エリザベス・シユヴァルトコップフやトーマス・ハンブソン、チェチーリア・バルトリ等の伴奏を行ったり、ステイヴン・イツサーリス等との室内楽、ウラディーミル・フェドセーエフ指揮のオーケストラでソロを弾いたりしている。去る6月18日にソロ・レパートリーの集大成としてCDが発売された(日本ではキングレコードより)。陽だまりのような彼女の明るい音色はスカララッティを輝かせ、モーツァルト、シューベルト、シヨパン、ブラームスへと感情を膨らませていく。歴



かつての神童、ウェンディ・ウォーターマンのCDが発売

史的価値のあるボリーナス・トラックも貴重だ。前述のデビュー・コンサートをBBCテレビが生放送した録音だが、1954年に東京交響楽団が招聘したマルコム・サージエントが、翌年イギリス国立ユースオーケストラを指揮した様子が聴けるのだ。そして10歳の少女が弾く「S・パツハ」ピアノ協奏曲第一番の普遍的な表現に驚かされつつ、身を委ねる。

彼女のピアノリズムはポジティブな音を保ちつつ、悲哀を帯びても、常に寄り添ってくれる温かさがある。10月8日のプライヴェート・コンサートでは、フォルテで音を押し傾向が感じられたが、Back to LiveプロジェクトのTシャツ姿で弾く彼女は等身大で、自然体に語りかけてくる。この日はCD収録曲にベートーヴェンのバガテツラとメンデルスゾーンの無言歌集も加え、美しい楽想に歌心を発揮した。